

論文審査の要旨

報告番号	修 第 1300 号	氏 名	浜 辺 峻 弥
論文審査担当者	主査	宮 川 哲 夫	
	副査	志 水 宏 行	
	副査	中 村 大 介	
(論文審査の要旨)			
<p>「くも膜下出血術後急性期における下肢筋肉量の経時的変化」について、くも膜下出血発症後外科的治療を施され、ICU 管理を要した 14 例を対象に、ICU 在室中の下肢筋肉量の経時的変化を知ることがを目的に、大腿、下腿の 6 筋の筋厚および大腿、下腿の 4 か所の周径の計測を「3 病日目」と「10 病日目」に行った。結果は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 「3 病日目」と「10 病日目」にかけて大腿、下腿の 6 筋の筋厚および大腿、下腿の 4 か所の周径すべてで有意な減少が認められた。2) 筋ごとの筋厚減少率に統計学的有意差は認められなかったが、下腿の筋よりも大腿の筋の筋厚減少率が大きかった。大腿、下腿の周径部位ごとの周径減少率にも統計学的有意差は認められなかったが、下腿に対して大腿近位の周径減少率が大きかった。3) 早期離床群と離床難渋群の 2 群間に下肢筋厚および下肢周径に減少率の差は認められなかった。ICU 在室中の活動度に関わらず、下肢筋厚および下肢周径は減少することが示された。4) くも膜下出血発症後における ICU 在室中の筋力低下は、廃用性筋萎縮だけでは説明のつかない筋力低下を生じている可能性が示唆された。5) 現行の早期離床プログラムによる下肢筋力低下の予防効果は十分ではないが、減少率の比較から下腿よりも大腿の筋に対する訓練に重要性があることが示唆された。 <p>くも膜下出血の早期リハビリテーションについて脳卒中ガイドライン 2015、Olkowski、守屋、Puthuchery、最上谷らの報告、超音波エコーについて福元、English らの報告、ICU 関連筋力低下や早期離床の効果・安全性について Schweickert、Adler、Kayabu、Li、Sommers、Bailey、Needham、Zanni、Balas、Stevens、Castro-Avila、武居、Truong、日本集中治療医学会のエキスパートコンセンサスを基に十分な考察がなされている。</p> <p>過去の報告では、本論文のような詳細な検討はなされていない。また、研究目的、方法及び得られた結果の分析も明確に示されており、先行研究に関する検討も適切に行われている。今後の臨床に応用できる可能性は非常に高いものと思われる。したがって、本論文は修士（保健医療学）の学位に相当するものであると判定する。</p>			